



レイチェル・カーソン 女史について

門田俊宏

レイチェル・カーソン(以下、カーソン女史と呼ぶ)は、一九〇七年五月二十七日、アメリカ合衆国ペンシルヴェニア州のスプリングデール(ピッツバーク北東約24キロメートル)の位置のアルゲーニー川溪谷に横たわる小さな町)に生まれ、生涯、研究生活で独身を過ごした。

両親について:教会カルテット(四重奏・四重唱の意味)をして州内を回っていたロバートと学校教員であったマリアとが結婚したのは一八九四年のことで、この夫婦の三人目の子として生まれたのが、後のカーソン女史です。結婚後、マリアは退職し子育てに専念しました。父のロバートは、保険の外交員や変電所のオペレーターをして生計を立てていました。その他、副収入として町はずれに大農場を経営していて、牛、馬、豚、鶏などがいて果樹園をもがりました。この大農場がカーソン女史の幼少時に「自然を愛する子」としてのすばらしい生育環境を提供したのでした。

また、両親は、カーソン女史の幼年から少女時代に、姉や兄から年齢の離れた彼女に深い愛情を注ぎ込みました。特に、母は身近な存在で、カーソン女史は母親に対して終生、敬愛しつづけたようです。次なる言葉を残しています。「私が戸外のことや、自然界のすべてに興味を抱かなかった……これらに興味は母から受けつづいたものであり、母とはいってもそれを分けあったものでした……私が知っている誰よりも、シュバイツァーの『生命の畏敬』を体言していました。生命あるものへの愛は、母の顕著な美点でした」と。

カーソン女史は、もともと、「作家」志望で小学4年生の時、『大空の戦い』という小説を書き、「セント・ニコラス」という著名な雑誌の(リーグ欄)に送ったところ、掲載され『銀バッチ』を受賞しました。この体験が後の大成のきっかけだったように思われます。この雑誌で、一九一九年には金賞をも受けました。やがて次第に彼女は「海」への想いを募らせてゆきます。一九二四年、ペンシルヴェニア女子大学に入学しこの間、コッド岬、ウッズホール海洋生物研究所にて夏期滞在しています。そして一九二八年、ジョンズ・ホプキンス大学修士課程へと進学しました。一九三二年には『海洋動物学』修士課程を修了します。卒業後、メリランド大学などで講師をしながら研究を続けました。一九三五年からは、アメリカ合衆国漁業局のためにラジオ台本の執筆を始めます。この年、父ロバートが亡くなりました。一九三六年には公務員試験

にトップで合格し、漁業局に正式採用されました。年俸二、〇〇〇ドルで家族も含め生活が安定しました。一九三七年、『アトランティック・マンスリー』誌に「海のなか」が掲載されました。

ところで、カーソン女史は生前、まとまった本としては、四冊上梓されています。三冊目までは、「海Ⅱ生物」物語です。一九四一年『潮風の下に』これが処女出版です。一九五一年『われらをめぐる海』、ベストセラーになりました。これを機会に一九五二年、四五歳にして魚類・野生生物局(編集長)を退職し、少女時代の夢、「作家」業に専念することになりました。一九五五年『海辺』、これもベストセラーになりました……一九六二年『沈黙の春』へと向かうのです。

そして、転機が訪れます。一九五七年を前後して、この頃、DDTの散布による様々な被害を訴える手紙がカーソン女史のもとへと寄せられました。『沈黙の春(Silent Spring)』を書かせる決定的な役割を演じたのは、彼女の友人から送られてきた——農業の空中散布によって友人の持つ私的鳥類禁漁区で小鳥がたたく死んだ、という報告の「ボストン・ヘラルド」紙への投書の写しと添えられた——手紙でした。カーソン女史は次述のごとく回想しています。「すべての事がらうのきつかけとなつたのは、新聞への投書の写しではなくて、あなたが私に宛てた私信でした。そのなかで、あなたはどのよう新しいより大規模な散布の見通しについてどのように感じておられるか

を語りました。それとともに、誰かあなたを援助できる人をワシントンに見つけるよう私に依頼されました。その「誰か」を探し求めるためにこそ、私は本を書かなければならないと自覚したのです……」と。しかし、カーソン女史が農業の問題を意識するようになったのは、この時が初めてではないことを確認しておきます。この『沈黙の春』の反響は大きく、賛否両論続出。出版の翌年、一九六三年四月三日にはカーソン女史は、CBS放送のテレビ番組にも出演したほどで、この年は彼女にとって、まさに「騒がしい春」だったようです。

一九六三年一月には、「シュヴァイツァー・メダル」を受賞。「沈黙の春」の執筆にとりかかった一九五八年、最愛の母マリアの死去にもであい、ショックのため遅れたほどです。そして一九六〇年、乳ガンが発見され、病魔との闘いでもありました。化学物質の発ガン性をも懸念していた科学者・カーソン女史がガンに全身を侵されたという事実は皮肉なものでも。そうして、『沈黙の春』の投げかけた波紋が広がっていくなかで、『センス・オブ・ワンダー』を遺作として、一九六四年四月四日、五六歳の生涯を終えました。その思想的核は、引用されたキーツの詩、「湖水のスケは枯れると云ってよいでしょう。いかに自然の破壊が愚かしいことでしょうか。シア・コルボーン他『奪われし未来』(翔泳社・一九九七)は、カーソン女史の『Silent Spring』の続編・現代版の内容をもった著作でしょう。